Japanese Association of Educational Psychology

乳幼児の母子相互作用（048～055）

座長　金谷　有子・藤崎真知代

048 乳児の気質・母子相互作用と社会的・認知的発達
——研究の構想と予備研究の方法——
北海道大学　三宅和夫

049 新生児特別養護施設における母子相互関係に関する研究
名城大学　神谷育司

050 母子相互交渉場面における行動分析の試み(6)
——母子相互の対応様式の因子構造——
和歌山信愛女子短期大学　庄司留美子

051 乳児の社会的インタラクションの発達的研究(6)
慶応義塾大学　金谷有子

052 生後3年間における母子相互交渉
お茶の水女子大学　藤崎真知代

053 2から23か月児に対する母親のことばかけの分析
東京大学　荻野美佐子

054 乳児期における愛着の形成及びコンピテンスについて
東京家政大学　大瀧ミドリ

055 育児観・育児態度の研究Ⅱ
——母親の育児不安・育児情報と幼児の適応——
文京保母専門学校　竹田せき子

質疑・応答

048：須田（東横女短大）は母子相互交渉の観察日時を1，3，7か月時とした理由，及び気質をどう捉えるか，神谷（名城大）は気質の具体的測定法について質問した。三宅は，月齢を選択した理由は特別にないこと，気質とは生得的で不変なものと考えられているが，環境との相互作用により変化し，発達的に捉えるべきものと考えるため Temperament の訳として不適当であること，実際には Carey の尺度，心臓数を指標とした Habituation を測定している，と述べた。

049：高橋恵子（国立音大）は本研究の理論的根拠を質問したのに対して，神谷は Klauss らの研究に立脚していること，また極小未熟児の追跡研究を通して，言語の遅れが初期の母子分離に起因すると考えている，と述べた。三宅は Klauss らの母子の結びつきという考え方には否定的な結果もあり，個々の母子にとっての母子分離の影響を捉えることの必要性を指摘した。

050：本研究に対しては，特に質問はなかった。

051：大浜（駒沢大）より資料の頻度の求め方についての質問があり，金谷は10秒が1単位で数えるが行動の流れも分析していると述べた。大瀧（東京家政大）の乳児行動と母親行動の発達変化の解釈についての意見には，まださらに検討が必要であると答えた。

052：若葉（東学大）より24か月時の言語的働きかけには動作が含まれるのかという質問があり，藤崎は24か月時の資料に限り言語的働きかけには動作も含まれるが，他の月時では含まない，と述べた。白石(金城大)，高橋恵子からの分析方法に関する質問に対して，1秒単位というのはすべての母子行動を生起した時点から持続する間記録するという意味であり，言語は内容によりひとまとまりとして数えた，と述べた。三宅は1，3か月時と36か月時では時間的に隔たりすぎて解釈が困難ではないかと質問したのに対して，初期との関連性と，その後の月時との関係性とを合わせて考察を進めてゆきたいと考えている，と述べた。

053：高橋恵子は因果関係を含む母子相互交渉の分析の指標として共起行動を扱う意味，有効性について質問した。荻野は相互交渉の捉え方は様々ある中で客観的に捉えられる広範囲の母子行動を，時間によって輪切りにし，数量的分析を行うことによって，因果性をも含めた仮説を導きだすことをめざしている，と述べた。金谷（慶大）からの母親のことばかけについて乳児の言語発達との関わりについての質的分析や事例研究を行っているかという質問に対して，そのような手法は行っていないが，共起行動の量的個人差，月齢変化により大まかな把握はできる，と述べた。高橋道子（東学大）は子どもの言語行動と母親の言語行動との正の共起が少ないことについての解釈を質問した。荻野は喃語は母親のことばかけと共起すると考えられるが，情報的意味，意図の伝達的意味をもつ原初語，及び言語は交互に生起するためではないかと考える，と述べた。

054：三宅，高橋恵子より Aivsworth の Strange Situation に関して，日本の被験者ではグループ分けがどのようになっているか質問があり，大瀧は詳しい分析はまだしていないと断った上で，グループBに分類される者の割合は米国と比べて低い傾向にあるが，三宅らの結果とほぼ類似することが確認された。

055：古沢（神戸大）は，集団保育の場での幼児の健やかな発達のためという目的と，本研究とは，どのようにつながっていくのか，と質問した。竹田は，幼稚園の場で遊べて適応的な幼児と，遊べない非適応児とを区別し，両者の母親の違いを検討したというのが本研究であり，先に挙げた目的と直接つながっていくものとは考えていない，と述べた。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

討論の概要

発表内容が多様であったため全体討議としては方法論について自由な論議が進んだ。

田島（北大）から，データのとり方と研究の焦点化，その際のパースペクティヴの関係を明示して欲しいという提議があった。高橋恵子（国立音大）からは，縦断研究の弱点とも言えるサンプルの質の片寄りについての意見があった。とる方法によって対象の数も結果もまちまちである点，それをどう解決していくのかという点，研究の結果一体何がわかったのか，何がわからないのかという点などを，サンプルの比較などではっきりさせるべきといった主旨の提案である。この意見に関連したことで森下(和歌山大)から縦断研究などにおいて，目的，方法との関係があるか，被験者の数は何名位でよいのかという質問があった。

川上（聖心女子大）は，どのような方法をとり，どのように相互作用を理論づけていくかについて，今のところ方法は経験によっていること，丹念に現象を記述し，母子の間で起こっている相互交渉を押さえ，関係そのものを捉えていく展望を持っているという主旨の意見を出した。

古沢（神戸大）は，母子関係の中で，こどもは何を得ていくのか，母子関係の中で表現されるものは何かについて母子関係を理論づけるものが必要であると述べた。これに対し三宅（北大）は，こどものその後の発達への影響はもちろんのことだが，母子関係そのものをとらえることの必要性を述べた。三宅は，例えば origin of reciprocity を考えるには，microanalysis による研究も必要ではないかと述べた。しかし母子関係をいくらでも細かく見ればよいという意味ではなく，追究する問題に応じて，種々のアプローチがあり得るし，分析もいろいろ考えられると断っている。

山田（愛知淑徳短大）は，古沢（神戸大）の述べた「生物学的なものが社会的なものにどうくみこまれていくか」という点について，母子交渉とどう関係するのかと質問した。古沢はこの質問に対し，最初は，Brazelton が言うような生物学的特徴をもった乳児が，母親がどのように自分のこどもを見るかによって次第に変わっていくと考えていると答えた。

若葉（東学大）から，母親の言語交渉の質的変換についてや，こどもが言語を獲得していく中で，母子相互交渉の様相はどのように変わるのか，その発達には何が影響しているのかといった主旨の提議があった。

神谷（名城大）は，この問題に関連して，3才児検診でことばの遅れを訴えるケースでは，母子関係を支えている父親との関係がきいていることから，相互交渉の中で何がどうきいているのか，どこをどう押えていればいいのかといった問題があると述べた。

庄司（和歌山信愛女短大）は，相互交渉をとらえていく上で，言語でコミュニケートしようと発動させる情緒的なもの，表情，身振りに支えられた関係が重要なのではないかと述べた。母親行動で言えば，言語的なもの，非言語的なものをひっくるめた母親のこどもへの反応が重要であると考えているともつけ加えた。末田（和歌山信愛女短大）も，母子が居合わせている場における言語に至るまでの雰囲気を重視している。縦断的に母子関係をとらえていく場合，観察によるデータばかりでなく，母親から得るデータをもっと重視すれば，現象も的確にとらえられる場合があると述べた。

今後の課題

昨年度は「乳児期の母子相互交渉」の特定テーマのもとに細かい具体的な討議が出たようである。今年度も「乳幼児の母子相互作用」という特定テーマではあったが，発表内容が(1)相互交渉そのものをとらえている研究，(2)相互交渉を認知発達などの別の測度との関連をとらえるものとに大別されたこと，しかも対象児が新生児から幼稚園児までにわたっていたこと，さらにそれぞれの研究者がもつ理論的背景の違いがはっきりしなかったことなどの理由で討論が実質的なものとして十分かみ合うことが困難な状態であった。討論を十分深めるためには，生涯を通しての相互交渉のとらえ方や相互作用の理論化に向けてといった問題を考える必要があったのではないかと思う。

研究者がどのようなパースペクティヴを持って研究を進めるかが根本的に違っていれば当然，アプローチの仕方や分析も変わってくるであろう。例えば，今回話題になった temperament 1つをとってみても，研究者によって，どのような意味で使っているのか，何のために問題にするのか，などについてくい違いがでたのである。数多くのデータを集め，証拠づけ，理論化を進める段階にあるのが現状といえるのかもしれない。

（藤崎真知代・金谷有子）

NII-Electronic Library Service